
デカ物語(未来)

田沢舞矛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デカ物語（未来）

【Nコード】

N0546Y

【作者名】

田沢舞矛

【あらすじ】

高木 渉（警部補）と佐藤美和子（警部）のお話

設定は未来

娘の妙和と幸せみかずに生活中

話は変な方へ（>= Rは付かないよ！！絶対に

こんな未来書いてほしい！！とかあればヨロシクお願いしますm（

l
l
m

1 (前書き)

妄想頭で頑張ってますよ!!

「あれっ？ 涉くん今日早番だっけ??」

「ああはい!!!!」

「あっそうか私と1日違いだもんね」

高木 涉 # 5年前同僚 & 先輩の佐藤美和子とゴールイン
今は美和子、美和子の母、そして・・・

「パパ行くの??」

「うん。昨日のママと同じ時間に帰って来るからね」

娘の妙和みかずと生活中

「パパ嘘じゃない?」

「事件が早く解決したらね」

妙和は嬉しそうだ

「あゝ涉くん、今日帰って来るとき私の机にある事件ファイル持ってきて」

「・・・僕、昨日帰って来るとき美和子さんの机の上に確か10冊ほど分厚いファイルが置いてあるのを見ましたよ」

「あー松崎家の殺人事件のやつ持ってきて」

その舌をだす行為禁止にしてください
僕、キュン死しちゃいます

「わかりました。松崎家ですね」

「どうも＊＊高木警部補」

高木警部補　それが僕の階級

えっ？美和子さんと同じ階級だって？

美和子さんは警部に上がったよ・・・僕に追い抜ける日が来るのか
な・・・

僕が警部補に上がったと報告するより先に美和子さんが走ってきて
「涉くーん警部に昇級したよー」
だもんね

「あつ・・・時間だいつてきます」

『いつてらっしゃい』

・・・いつの間にかお義母さんまで・・・

「いつてきます」

「たっかぎーオッス!!」

「ゆっ由美さん!」

「玄関に探偵団、来てたわよ」

探偵団・・・コナンくん達が
今日は約束もないし・・・

「...今日は約束なかったよな...で顔してる・・・」

「はい。今日は何にもないですし・・・事情聴取は明日ですし」

「届け物らしいわよ」

はっ!?!前の事件の渡し忘れ?いや、ただ犯人が首を吊ってただけ
だし・・・

だけって・・・警察失格だよ・・・いや

『高木刑事』

探偵団の皆が走ってきた

「さっきね佐藤刑事に会ったんだあ!!で私達今から社会科見学があるから渡しに来たの」

「ありがとう。社会科見学の方は大丈夫なの?」

「・・・大丈夫よ、小林先生・・・いや白鳥先生っていった方がいいのかしら・・・捜査一課なら良いって言ってたから。条件付きでね、あつ今は捜査二課にいるわよ」

相変わらず6年になってもクールだなあ哀ちゃんは

「条件って？」

「白鳥刑事に弁当届けるんだよ」

「白鳥さん？」

「でも今いないみたいだね」

ああだから今日白鳥さん調子がわるかったんだ…

「今白鳥さんなら4丁目の事件に行ってるよ、メモと一緒に置いておこつか」

「うん」

それからいろいろあったが何とか早めに切り上げる事ができた

「・・・松崎家の殺人事件のファイルは・・・」

「あれ？高木さん - 何やってるんスカ？
いくら夫婦だからって机をいじっちゃあ／＼」

「千葉」 松崎家のファイル知らないか？探しても見当たらないんだよな」

「もしかしたら机の中とか・・・昨日佐藤さん机の中に青いファイル入れてましたよ」

流石千葉、よく見てる

「何番目？」

「確か一番大きい引き出しに・・・」

「あつあつたあつた／＼あ」

「高木さんどうかしました？」

「今日何日？」

「7月25日ですけど」

そこには黄緑色の袋に入った小さな時計があった
そして《W a t a r u》と彫られていた

「高木さん良かったですね・・・」

「ああ　んじゃ帰るとするか」

「直ぐに調子にのるお父さんって子供が苦労しますよ」

「娘の前では立派な父親でいたいよ・・・」

「おや高木くん」

「白鳥さん」

「これ僕の机の上に置いてありましたよ」

「ああ　　@&」

「それって妙和ちゃんが生まれるちょっと前の写真だよな」

「はあ／＼でも僕のはちゃんと定期入れに入っていますけど」

「佐藤さんのでは？」

「ああそうか」

「高木くん！！」

「目暮警部！！」

なんで帰ろうとするとそうぞろぞろと...

「君にお届けものだ」

「パパ」

「妙和！？何で？？」

「もー妙和ったら出るの早すぎよー」

「美和子さん！？」

へっ！？なんで二人が

「いやあ涉くん帰って来るの遅いし私ももう張り込みの時間だから連れてきて涉くんに預けようかと」

「もし僕がいなかったらどうしてたんですか？」

「涉くんの机の上にメモ残して由美のアパートに連れていこうかと」

はあその手があったか

「でもお義母さんは？」

「あー突然友人の法事に」

「パパ肩車して」

美和子さんと同じ顔で訴えられると弱いんだよな僕

「やった〜」

「あつ時間だ！！目暮警部！！1丁目の張り込みいつてきます」

「ああ頼んだぞ」

「了解！！んじゃ妙和おやすみ」

「ママいつてらっしゃい」

「いつてきます！！あつ涉くんお誕生日おめでとつ！！！！」

「ありがとうございます。あつ気を付けて」

流石元陸上部エース

速い

「妙和ちゃん将来の夢は？」

「パパとママみたいな捜査一課の刑事さん」

「そーか頑張つてね」

「ママにできたんだから私にもできるもん」

白鳥さんすごい顔してる

「まあ妙和、前の不審捕まえたもんな」

「うん！！踵落としと関節固め」

「妙和ちゃん何歳？」

おーあれ以来初めて警部が口を開いた

「4歳」

「後20年か」

「？」

「高木ー早く帰ったらどうだ」

「あっはい」

「妙和ちゃんの腹の虫泣いているぞ」

「帰りにコンビニでも寄ったらどうだ」

「前のセブイレブンおにぎり半額セールやってるぞ」

「あっありがとうございます、お先に失礼します！妙和行こっか」

「うん」

「明日は佐藤くんと交代の時間だからな。遅刻したぶんだけ佐藤くんに迷惑がかかるぞ」

「了解しました」

3 (後書き)

何とかギリギリ・・・
キスシーン出したい(;´・`)
(

4（前書き）

感想有難うござっす
作者の性格はバカなので許してね

「ねえねえパパ？ママってスゴいの？」

どきっ

まさかとは思うが・・・

「何でそう思うの？」

「パパより偉そうだから」

やっぱりそうきた・・・

「確かにママは偉いよ。でもさっき一緒にきた目暮警部わかる？あの人はまだ下だよ」

「・・・パパよりは偉いよね？」

「んー・・・まあね」

「決めた！！！妙和絶対パパより強い正義の味方になる！！でね、事件がない世界にするんだ！！」

まだまだ可愛い夢だなあ

「妙和？正義って言葉は心の中で唱えるモノなんだよ？言葉にだしたら正義じゃないんだ」

「？」

あー美和子さんも分からないときこんな顔するよなあ

「・・・後でママにおにぎり持って行こっか」

「うん!!--!!」

「・・・あつ 涉くん有難う」

「・・・やっぱり白鳥さんですか」

「やっぱりって・・・」

「おにぎりの差し入れです」

「有難う涉くん 昆布あるかなー」

「・・・白鳥さんは?」

「僕は澄子さんにサンドイッチ作って貰ってますから」

「愛妻弁当ですか・・・」

「いっただきまーす」

「あっお茶とジュース後ろに置いておきますね」

「了解」

「じゃあ明日の交代の時間にまたきます」

「OK!!!高木渉警部補」

「・・・美和子さん楽しまないで下さい」

「つい楽しくて、あっお母さん明日の朝に帰ってくるから」

「わかりました報告有難うございます」

5（前書き）

げき短文・・・

理江が担当致しました

・・・悔しいけど舞矛のほうに才能あるかも

朝7：20

「渉さん時間は・・・」

「・・・へっ?」

あれっ?お義母さん?

「もう起きないと遅刻しますよ」

「えええ!!!!すみませんワザワザ・・・」

「渉さん美和子と交代ですか?」

「はい」

「これ郵便局で・・・て渡して置いて下さい」

「あっはいわかりました」

「渉さんが・・・て考えてちゃあダメよ昼の12時までには郵便局だから」

「わかりました」

「美和子さん白鳥さん交代です」

「あらもうそんな時間？」

「・・・高木くん一人で？」

「いえ後で千葉がきます」

「ほう」

「あつ美和子さんこれを・・・お義母さんが直ぐに郵便局にと・・・」

「

「へえわかったわ。妙和は？」

「多分まだ寝てると…僕が出発したときまだ寝てましたし」

「わかったわ。有難うね」

「いえ・・・」

「千葉くんが来たようだ」

「白鳥さん、これ美和子さんと食べて下さい」

「有難う」

6（前書き）

高佐好きさんへ

グダグダな文でお許しください（汗）

今回は千葉が登場します

コナンの雰囲気だせてなくてすみません

「後はお願いしますね」

「わかりました！！白鳥警部どの！！」

「・・・高木くん」

「犯人の動きはなしでいいんですよ」

「・・・動いていたら私達ここにはいないわよ」

「あっはははは・・・そうっすね」（汗）

「後は頼んだわよ」

「はい！！二人ともゆっくり休んで下さい！！！！」

「高木さん！！！！遅れました／＼／」

「見たらわかる」

時刻は10時43分
二時間の遅刻

「・・・どうしてこんなに遅れたんだ・・・」

「あー僕低血圧で・・・」

僕だって低血圧だよ・・・

「もしかしての佐藤さん達との交代では？」

「そうだけど・・・なぜ？」

「いやあ高木さんの頭がぐしゃぐしゃですから」

・・・なぜそれだけでわかる

「高木さんが髪の毛をぐしゃぐしゃにして張り込みに来たときは大抵佐藤さんがからんでますからね／＼まあ彼女に簡単にいえば残業？させたくないんですよね」

「その天才な頭、事件のトキに使え」

「わかりましたあ（汗）」

そのまま時間は過ぎ、交代の時間になった

「お疲れ様でした」

「後は宜しく願いますね」

「了解しました。高木警部補」

「ただいま」

僕はいつもより早めに帰れることになった

「パパお帰り」

「妙和ただいま」

「あのね、ママがねおばあちゃんとケンカしてるの」
「ケツケンカですとー」

「たっただいまです！！！！！」

「あら涉くん（さん）早いね」

「あれっ？ケンカは？」

「ケンカなんかしてないわよ」

「妙和がなんか」

「ああこれよこれ」

・・・煮物？

「いやあ私は薄味の方が好きなんだけどお母さんが
「渉さんは絶対に濃い口派だ」とか言ってる」

渉くん、薄味派よねー

「僕どっちも派なのでどちらでも大丈夫ですよ」

ほっとしたような落ち着いたため息が聞こえる

これでケンカ、なくなるのかなー

8（前書き）

検問終了}

・・・普通検問はだいたい交通課なのに何故捜査一課なのだ！！
それは殺人事件の捜査だからだ！！

その日の食卓には美和子さんが作ってくれた料理が並んだ

「・・・薄口か濃い口か・・・」

「涉さんならどちらを選びますか？」

「・・・ええつと・・・僕はどちらかと言われても・・・」

「涉くん・・・早く言いなさい」

そんなに攻めないで・・・

「みつ妙和は？」

「薄口と濃い口って何？」

「・・・そうか・・・まだ分かりませんか・・・」

「僕は薄口派ですかね・・・」

「わかったわ」

「・・・これで良かったんですね

次の日・・・今日は家族みなでお墓参りに行くことになっていた

美和子さんのお父さん、
佐藤正義さんのお墓に…

「ママ、この大きい石何？」

「墓石よ、この中におじいちゃんがいるのよ」

「おじいちゃん？」

あー涉くんのお父さんは優^{まなみ}さんで本人の希望から優^{ゆう}ちゃんとあだ名
呼びしてるからおじいちゃんがわからないのか…

「ママのパパよ・・・」

「へえ・・・警視庁の刑事さん？」

「!!!!!!!!!!」

何故知ってるの？

私は一回も言っていないわよ

「お母さん言っただの？」

「言っていないわよ」

「涉くんは？」

「いえ・・・僕は正義さんのこと全然知りませんし」

それはそれでどうかと・・

「妙和、なんで分かったの？」

「だってママとパパ刑事さんでしょ？だから」

「・・安易ね・・」

「？」

8（後書き）

理江が担当しました

墓ネタ、最近墓参りが多かったこともあり書きたかったんですよー

つぎはもっと分かりやすく書くぞー！！（ 決心

9 (前書き)

今日は手持ちぶさたの為出来る限り更新したいなあと思っています

* *

もっ 勿論、手は抜かないですよ!! (。 ; ;)

お父さんー…

私はもう33歳になってしまいました

妙和は4歳です

渉くんが我が家に来てから5年が経ちました

そしてお父さんが我が家を去ってから27年ですね…

あの頃の私は人を好きになるのが怖かったです。でも、いまは違います

人を好きになり、愛する

それが私の使命です

お父さんー…今まで見守ってくれていてありがとうございます

そして松田くん

相変わらず萩原さんと吊るんでいるのかなあ

これからも私達のことを見守っていて下さいね

(渉)

正義さん、お義母さんと結婚し美和子さんを貴方の娘さんにしてくれてありがとうございます

貴方のおかげで今、二人とも幸せです

9 (後書き)

まだ続きます

10（前書き）

救急箱って私なんか好きなんだよね

まあ怪我をするのは私じゃなくて私が技かけて受け身を失敗した舞
矛だけだね

常に救急箱は包帯で一杯（笑）

あれから14年がたった

「今日からここ捜査一課強行犯捜査一課に配属されてきました高木妙和です！皆さん知ってると思いますがよろしくお願いします」

高木と佐藤の子供の妙和が捜査一課に配属が決まった

「担当は・・・中原淳沙くんよろしく」

「了解しました」

「中原くんよろしくお願いします」

「こつつこちらこそヨロシク」

今中原くんが舌を噛んだ理由

勿論妙和が佐藤そっくりで可愛く美人だったから

それ以外に理由はない

「高木渉！！取り調べ終わりました！！」

「ああ高木くん早いね・・・」

「・・・白鳥さんもう少し取り調べが早く終わったことを喜んでくださいよ」

「佐藤美和子！！犯人確保しました！！ただいまより取り調べを実行いたします！！・・・あら・・・妙和！？」

「今日より捜査一課強行犯第3係りに配属になりました！！ヨロシクお願いします」

「・・・佐藤さん、取り調べ、拝見させて頂いてよろしいでしょうか」

「あら中原くん・・・どうして？」

「今後の高木さんに佐藤さんみたいな取り調べの仕方を仕込んでおきたくて」

「まあいいわ・・・涉くん取り調べするから同行しなさい」救急箱持ってきてね」

「「きゅっ救急箱！？」」

どうして取り調べに救急箱がいるのかわからない二人だった

10（後書き）

はっ 話飛びすぎたああ!!

救急箱は直ぐに使われることになった

「俺は無実だあああ！！」

そう叫んだ犯人が逃亡をはかりー・

「あつ・・・」

「ウラアアアア！！！」

きれいな佐藤さんの背負い投げがきまり、犯人は取り押さえられた

「バカねえ・・・痛い目に会いたくなかったら逃げようなんて考えなかったら良かったのに」

「・・・」

その後取り調べは無事行われた

「バツカッタレ！！！」

バツカッタレ？バカッタレじゃなくて？

「相手が別れ話を仕掛けてきた、だから殺した・・・言い訳になってないじゃないの」

「あんたには言われたくないぜ。どうせあんたは人生上手く・・・」

バシッ！！！！

「貴方は命の重さがわかってない！！私ならもし涉くんが別れ話を仕掛けてきても、好きだった彼氏を殺したりしない・・・大切な人には幸せになって欲しいから・・・私ならその人と居た時間を大切にする」

「それはあんたの考えだ」

美和子さん・・・

「確かにそうよ・・・でも私は涉くんが別れ話を仕掛けてきても、・・・離婚したいって言ってきたてももう一度話し合う・・・直ぐに殺したりはしないわ」

「・・・俺は相当な大バカ者だったみたいだな・・・」

こうして事件は終止符を切った

「妙和、中原くんごめんね／＼取り調べらしく無くて」

「いえ／＼でもかつこ良かったですよ。佐藤先輩」

「・・・お父さんって愛されてるわね・・・」

「へへへ・・・」

11 (後書き)

雑デスク・・・

雑すぎる・・・ごめんなさい

取り調べは思っていたよりも長かったらしく取調室をでたら既に日が暮れていた

「妙和は今日何時上がり？」

「ええっと・・・確か8時上がりだったと・・・お母さん明日非番だよー」

「ええ。あっそうだし郵便局でハガキ30枚お願いできる？」

「いいけど何で？」

「クラス会だつて」

「・・・お母さん参加できるの？」

「無理だからハガキを担当したのよ」

「行ったら？」

何を言っているんだろうこの子は

「だって20年近く行ってないんでしょ？」

「その日は日直よ。行けるはずないじゃない」

「いいじゃん」

「・・・」

「美和子さん犯人の連行をしますので一緒に…」

「あっうん!! あっそうだ妙和!! 聞き込みとかの時は「佐藤さん」って言うてね」

「・・・なんで」

「同じ課にいるなんて何か恥ずかしいもの」

「あっそう」

「美和子さん!!???.??.?」

「あっうん今いくゝじゃあ妙和、ハガキヨロシクね」

「ハイハイ」

12（後書き）

私も同窓会企画係だったなあ・・

参加ができないためハガキを送ってます

何故か

特に意味はない

でもお詫びの気持ちを込めて人数分のハガキをもう一人の担当に送る

私は今東京にいますんですけど実際のふるさと？は大阪です

最近ずっと美和子さんの熱が続いている

「今日病院行ってくるわ…流石に2週間続いているし…」

「あーお母さん私もついていく」

「あなた仕事は？」

「今日非番」

「おめでとつございます
2カ月です」

「ほえ？」

「本当ですか!？」

妙和はいつもよりハイテンションだ

「今何て？」

「・・・おめでとございます。…年の離れた兄弟ができたんですよ…」

「ええ!？」

「涉くんお帰りなさい」

「ただいま…どうだった？病院での診断」

「あっお父さんおかえり」

「妙とお風呂沸いてるわよ」

「わかった」

………

「2カ月だった」

「・・・へっ？」

「妊娠してた」

「えっ・・・」

「今が11月だから・・・7月に生まれるよ・・・」

「本当ですか!？」

「なっ何涉くん泣いてるのよ!！」

「嬉しいんです」

「・・・私も・・・」

「妙和と違って次は夏ですね・・・」

「そうね」

「大丈夫です!美和子さんは僕が守ります」

「ありがとう」

13 (後書き)

たっ高木！！美和ちゃん絶対守れよ！！守らなかつたらお姉ちゃんが許さないからね

高佐好きさんからのリクエストでした でも続編

14（前書き）

渉利〃くしゅうりと読みます

時がたつのは早いもんだ

「涉くんもう上がり？」

「・・・あつ美和子さん…はい！！報告書も書き終わりましたし…
渉利のお迎えいつてきますね」

「本当に？」

「僕が早く終わらせたら駄目何ですか…」

少し拗ねてみる

「ええ明日雨が降るわ」

美和子さんひどいです

「じゃあいつてきますね」

「いつてらっしゃい」

僕は先輩達に挨拶をし一課の大部屋をでた

「こんばんは…高木です高木渉利のお迎えに来ました」

「・・・渉利くん…?」

「はぁ・・・」

「・・・友河さん！警察に通報して！」

「はいっ！」

「・・・なんだ

「あつあの・・・」

その時僕の仕事用のケータイが震えだした

「はいっ！！高木です！！」

「渉くん！？今どこ？」

「どこって・・・保育園まで来ましたよ」

「えっ？犯人逮捕したの？」

「いえ・・・」

「早く！！！」

「・・・犯人？」

「えっ？」

「もー何しているのよ！今、保育園前に怪しいケータイで電話している人がいるのよ！！」

「・・・あつ」

僕は保育士さんの前に立った

「あの・・・勘違いです・・・警視庁捜査一課の高木と申します」
渉利の母親と同じ警視庁にいます・・・」

「えっ？・・・」

「わったる！！！！」

ドデカイ美和子さんの声が受話器から聞こえる

「逮捕したの？」

「あつそのお・・・僕の事です」

「??」

「あつあの・・・すみません間違えて・・・」

「いついゃ・・・」

「すみません切りますね」

そう言い、電話を切った

「今日、妙和さんが引き取りに来て…お父さんにしては若くて…んでその…初めてお会いしましたし…すみません！！！」

…所々不機嫌な言葉も混じっているが良いか…

「いえいえ…僕こそ妙和には聞いてなくて…」

僕は保育士さん達に頭を下げ保育園を後にした

14（後書き）

渉利くんまだ出てこない…

今日の非番なくなった…悔しいです（- - #）
犯人に愚痴

「ただいま」

「あつ涉くん・・・とんだ不幸だったわね」

「ええ」

美和子さん・・・帰ってましたか

「あつ・・・お父さん、ごめんなさい・・・」

妙和があやまる

「いいよ・・・てか僕って不審な顔立ちかなあ」

「んー最近老けて来てるからねえ・・・」

美和子さんひどい！！

「パパパパ・・・」

「おお涉利・・・ただいま」

「あー」

まだまだ可愛い息子

どんな未来になるのだろうか

「なんか焦げた匂いがします…」

「あっイケナアイ…肉じゃが火にかけっぱなしだ…」

「肉じゃがですか…ってええ!!!」

「大丈夫よ消したから」

このままずっと危ない日が続くのは流石に嫌だな

「涉くん涉利とお風呂入ってきて」

「はい」

平和な日が1日でも長く続きますように

15（後書き）

終わりに問題がありますが一応続きます

16（前書き）

高佐対談しかしてない

妙和ちゃんと渉利くんもなるべく出したい・・・

リクエスト、バンバンどうぞ！

佐藤さんかぞえたら48歳ですが・・・見なかったことにしてください！！

今日は偶然美和子さんと僕の非番が重なっていた

一年に一回重なるか重ならないかの非番

「トロピカルマリナランドに行きましようか」

急に涉くんが言い出したものだから内心びっくりしている

「今日？」

「ええ」

「今から？」

「勿論」

急に涉くんから出される言葉にはビックリさせられる

「だって渉利まだ2歳になるまえよ」

「渉利が10歳くらいになるのを待っていたら僕たち50歳になつてしまいます」

「・・・まだ体は20代よ」

「まあ毎日犯人と追いかけてすごすもんね」

「ええそうね」

「……………で行かないの？」

「あつ開園まであと20分だ…」

「今日に50万人達成とかなんかあるの？」

「あつバレてました？」

流石美和子さん

なんでもお見通しだ

「景品は？」

「マリンランド入場券…50回分」

「いこつかあ」

「えっ？」

「早くいくわよ」

「はっはい！」

16（後書き）

50 目前の高佐ですが

まだまだ体は20代！！

心も20ってことにしてください！！！！

17 (前書き)

今日は帰って夕方までぶっとうして寝るぞ!!
次の更新は明日かなあ…

2日間徹夜だったから寝かせて…

って事で僕たちはトロピカルマリニランドに来ていた

「人、少ないわねえ」

「そうですね…」

ヨチヨチ歩く渉利から目を離さないようにしながら歩く

「お父さん！！お母さん！」

その時、勤務中の筈の妙和が走ってきた

「妙和どうしたの？」

「あのね…ここで麻薬の密売が行われる可能性が高いんだよ…だから張り込み」

僕も麻薬の密売を追いかけた事があるなあ
あの時の指輪のローンは痛かった

「どんな男？」

「違うの、今回は女…写メ送るから」

妙和から一枚の写真が送られてきた

「…朝霧夏樹？…」

「お父さん知ってるの？」

「ああ美和子さんが昔撃たれて意識を覚まらず寝ているとき、起こった事件で…被害女性が朝霧夏樹なんだ」

「…私、意識戻ってから聞いてないわよ」

「言ってなかったです」

なんか嵐の予感

17 (後書き)

警視庁出るぞ!!
帰って寝るぞ!!

次は明日の早番か・・・

18（前書き）

久々の更新のような気がする

じゃあ朝霧夏樹を見つければいいのね

美和子さんは呟いた

「うつんまあ…」

「涉くん、パレードの時に来ましょ」

「へっ?」「」

何を言っているんだろう

娘が担当しているヤマだぞ!?

「私の長年の勘ではパレードね」

「どうして?」

「人が多いから」

普通反対じゃないか

「でも、少ない方が…」

「少なかったら少なかったで顔なんかすぐに覚えられちゃうわ」

なるへそ!!

「パレードは…7：30ね…時間まで遊び尽くすぞ」

体力がなくなるくらい程度にしてほしいな…

18（後書き）

弁当作らせたらよかった（汗）>|| 美和ちゃんに

19（前書き）

更新遅れてごめんなさい

「涉くん!! コーヒーカップ行くわよ!!」

いつまでも元気& a m p・体力がある美和子さんはすごい

「はっはい!!」

どうする事もできずにしぶしぶついていく

「早く」

かわいい…

「あっ…」

「涉くんどうしたの？」

「いえ…」

ヤバイ… 白鳥さん一家だ… 白鳥さん、小林先生、そして一人息子の澄朗くん…

「白鳥くんじゃない」

いきなり声が聞こえたかと思うと美和子さんが白鳥さんに声をかけていた

「わぁ…この子が澄朗くん? 似てるわね」

「みつ美和子さん？」

「涉くん！！白鳥さんと小林先生と息子さんの澄朗くんだよ！！流石親子！！似てるわねえ」

「佐藤さん…高木くん…」

「こんにちは。白鳥さん今日非番でしたっけ…」

「いや…密売だよ」

「ああ…」

「んで今日は帝丹小も休みだから澄子さんたちに手伝ってもらっているんだ」

「際ですか…」

「高木くんたちは？」

「いやあ久しぶりに非番が重なったもので…」

白鳥さんは羨ましそうな顔をしながら、「見つけたら電話をしてください」と言い、僕たちの近くから離れていった

19 (後書き)

次はもう少し早くに更新を…

20（前書き）

20だ

これは事件なのか（笑）

「白鳥くんも大変ね…まあ早くコーヒークップ乗りましょ」

「はっはい!!」

案の定僕と渉利は酔ってしまった

「もー…大丈夫?」

「だめ…」

「お茶買ってくるわ…渉くん。緑茶でいい?」

「任せます」

「もうじきね…」

「えっ?」

「麻薬の密売」

「まさか忘れてたの?」

「いついえいえ…」

やばい 忘れていた
美和子さんのコーヒークップで飛んだのかな

「じゃあ行きましょ」

「はい」

僕たちは事件に関わっている間、小林先生に渉利を預けることにした

「先生、お願いします」

「了解しました」

僕たちは小林先生に渉利を預けて走った

20 (後書き)

次はもっと分かりやすく書こう (^ - ^)
V

21 (前書き)

かつ書いたぞ…
内容進みすぎた(汗)

「こちら佐藤、ただいまターゲット（朝霧夏樹）発見！！ミラクル観覧車前に至急応援を」

「了解、直ちにそちらに向かいます」

「動かないですね」

「そうね」

「いつに…観覧車の前に…男性が」

急に走ってきた男…

指名手配中の赤羽周作

「指名手配中の…」

「ええ…こつちにしたら好都合ね」

「パッパカパーン！！」

パレードが始まった

「こちら佐藤 & a m p ・高木、いまから朝霧達の後ろに並びます、

ばれぬよう監視をします。私達は7…」

「佐藤くん！？どうしたんだ」

「ここは私、高木渉と妙和がいきます」

ここはとても大きな観覧車があることで有名な遊園地

「たまたま72番のゴンドラが…」

場所は違うが松田刑事が爆死した72ゴンドラ

「佐藤くんは今？」

「…」

「分かった…高木両名、よろしく頼む」

「ラジャー
了解」

22 (前書き)

終わりがやばい

高木両名のおかげで朝霧と赤羽は逮捕された

「美和子さん、大丈夫ですか？」

「……」

泣いていることがよくわかる

「お母さん……」

「松……」

昔に恋をしていた松田陣平刑事の事だろう

「あのとき約束しましたよね……僕は絶対に貴女の側からいなくならないって……大丈夫ですよ？」

「？」

妙和はなんにも知らない

妙和が生まれる前の話

「これから72番のゴンドラが来ても貴女を（多分）泣かせません」

「……本当？」

「はい…多分ですけど」

……誓います

いくら長い年月がたって貴女を泣かせません

貴女より先に死にません

貴女を残して逝くなんて僕にはできないから…

22 (後書き)

高木！！絶対に誓えよ！！

あーまだ続きます（笑）

いい終わりだけど涉利全然だしてない

「小林先生、ありがとうございました」

「いいえ、渉利くんお利口さんでしたよ」

「ははは…人見知りなもので（笑）」

私達は渉利を小林先生から引き取りトロピカルマリニランドを後にした

警視庁

「目暮警部…来ました…」

私達はその間由美に渉利の面倒を見てもらうことにした

交通課なら面倒を見てくれる婦警さんが沢山いる

「事情聴取中ですか？」

「ああ…なぜか皆泣いてな」

「はっ？」

意味がわからない
もしかして渉利が僕似だからか？

「デスクワークしとこっか」

「そうですね」

「あー高木さん！？今日は非番だったんじゃ…佐藤さんも！？もしかして交通課にいたのは渉利くんっすか？」

いきなり叫び出したのは千葉くん

「お前何で交通課に？」

「いやぁ苗ちゃんが弁当作ってくれて…それとりに」

「ふーん」

確か千葉くんと三池さんって同級生だったっけ

「佐藤さん…なぜいるんですか？」

「…トロピカルマリナランドで麻薬の密売を見たから」

「お前が三池さんに弁当貰ってる時にな」

「うつ…僕だつてずっと交通課にいたわけじゃあないっすよ」

「あつ…白鳥くん…終わったの？」

取調室のドアが開き、白鳥が出てきた

「ええ、全部吐きましたよ」

「テープ貸して」

「えっあっはい」

佐藤はテープにイヤホンを差し、聞き始めた

「…」

「美和子さん？」

「静かにして！！これ、音ちっちゃいんだから」

「はい…」

その日は内容を原稿用紙に訳してから帰宅になった

「渉利寝ちゃったわね」

「そうですね」

私達は夜の交差点を静かに走っていった

「明日は昼からかぁ」

「そうですね」

「夕飯は適当でいい？」

「そうですね」

「・・・寝かけてる？」

「すっすみません!!」

助手席の渉くんは渉利を抱きながらうつうつとしている

「あと少し!!」

「はい!!」

24 (前書き)

入学!!

「涉くん…涉利の入学式、遅れるわよ」

「はっはい!!」

今日から涉利は1年生になる

「お父さん!!早く」

「ねっネクタイが…」

ネクタイがこんがらがつている

「やってあげるから動かないで」

優しい美和子さんが直してくれる

「早く行きましょ」

「はい!!」

私達は帝丹小学生に涉利を入学させた

理由は警視庁に近い、新一さんと蘭さんの子供の瑠那くんがいる、
いまでも小林先生が勤務しているというすごく簡単な考え

「ショウーお父さんと私は入学式終わったら直ぐに警視庁いかなきゃダメだから…ホームルーム終わったら警視庁きてね」

「うん、わかった」

私達は早番の妙和に渉利を連れてかえって貰うことにした

さすがに帝丹小学校から自宅までは4？はある

「お姉ちゃんのところに行くんだよね？」

「うん、行き方はわかるよね？」

「もちろん！！」

涉くんの用意が終わり、私達は赤いアンヒィニに乗り込んだ

24（後書き）

季節外れたよ…

春話って（笑）

入学式も無事に終わり、後はクラスみんなで自己紹介をしてから帰るとのこと

「あとで警視庁行くからね」

「捜査一課にくるのよ」

「分かってる」

担任は白鳥先生

「自己紹介は名前、誕生日、将来の夢、家族について言ってね」

渉利の番

「高木渉利です。」

誕生日は1月10日

将来は警視庁の刑事

家族構成は警視庁で勤務しているお父さん、お母さん、お姉ちゃん

です」

言えた

「よろしくお願いします」

「高木〽サッカーしないか？」

「ごめんね…家が遠いからお姉ちゃんに送って貰うんだ」

「ふーん」

「バイバイ」

「おお…」

「確か右いつて…」

「シヨークン!!」

「うっうわぁ!!由美さん」

「他の誰に見える?」

いきなり抱きついてきて抱き上げてきたのは交通課の宮本由美さん

「おっ下ろしてください」

「美和子のところ?」

「うん」

「今は休憩室にいるわよ」

「ありがとう!!由美さん」

「・・・私も行くわよ」

「?」

「お姉ちゃんがココア奢ってあげるわよ」

「いいよーお母さんいるんでしょ?」

「多分ね」

「？」

「大部屋にはいないわよ」

「妙和姉ちゃんは？」

「もうすぐ帰ってくるわよ」

「お父さんは？」

「神奈川まで行ってる」

「・・・」

「行くわよ」

「うん」

27（前書き）

由美さん出してみた

うち、由美さんのキャラもすきやなあ（笑）

この子可愛すぎるんだよ…

さすが高木と美和子の子供ね

「由美さんケータイ持つてる？」

「ええ持つてるけど」

「貸して下さいー!!」

ケータイを渡すとキーボードを押し始めた

「090の……」

電話するのね…

「あつ…お母さん？」

美和子にかあ…妙和ちゃんかと思ったのに

「いま？由美さんと休憩室にいるよ」ココア奢って貰ったんだ」

素直だなあ…

「うん…分かったお母さんのデスク前ね…待っとくから」

そう言つと通話の「切」を押した

「由美さんありがとう」

「どういたしまして」

「僕、一課にいくね！」「コアごちそうさまでした」

「またね」

「うん」

渉利は一課目掛けて走っていった

「お母さん!!」

「涉利くお待たせー」

なぜか後ろからガヤガヤ聞こえる

「何かありました?」

今日は11月7日……

「爆弾は何処ですか!?!」

「我々はグリーンの神…」

「はぁ？」

いきなり白鳥がしゃべりだした

「20年前の敵を取るべく日本のリーダーに七色の花火を取り付けた命が惜しいなら外せばよい

だがついでに1000万人以上の人質が出る」

「文才ゼロね」

「ええ…多分文は今、まだ牢屋にいるものが書いていたかと…」
この文はどうせ警視庁…

警視庁に爆弾があると言ったこと

「裏に何か書いてるわよ」

白鳥は裏を向け文をよみだした

「沢山の部屋の大部屋…隠しは鉄箱

その花火は建物全体を破壊しす」

「…阿笠さんから預かったのも鉄箱よね？」

「トロピカルレインボー？」

「……………」

やばくないのか？

「トロピカルレインボーは米花博物館で結局使わなくて……今度の廃校を爆破する為に預かってるやつよね？」

「たつたしかに……」

「廃校を軽く爆破するくらいだから……警視庁のなんか簡単よね……」
ヤバイヤバイ……

「爆弾処理班呼んできて!!」

「はい!!」

28（後書き）

キャラが勝手に動いて困ったよ（笑）

やっぱりトロピカルレインボーのタイマーが動いていた

「正解ね」

「さっ 佐藤さん冷静ですね」

「まあね」

ウインクは意味があるのか

「解体しましょうか」

「ええ」

「勇気ある警察官に次ぐ…」

「はあ？」

後ろからいきなり大型な男が現れた

「誰よ」

「…さあな」

意味がわからない

「解体したら俺が吹っ飛ぶぜ」

まさか

男の体には無数の爆弾がセットされていた

「どうするんだ？」

男は低い声で挑発させてくる

「ごめんなさいね」

いきなり佐藤が口を開いた

そして

「ウラアアア／＼」

佐藤の必技背負い投げが決まる

「はずさせて貰うわね」

たった10分の殺人（未遂）劇は幕を下ろした

「ばかだったわね」

「そうっすねー」

たしかにアノとき出てこなかったら…

「まあ終止符を切ったわけだし…」

いきなり佐藤の声が途切れた

「美和子さん…」

佐藤をみると涙を流してる

「…いいですよ…泣いても、僕が守りますから」

「…松田くんの…」

「はい…思い出したのですよね…」

「うん…」

「僕は何があろうと貴女を守ります…いなくなりません…」

「二度目のプロポーズ？」

「そうです」

「いなくなったら怒るから」

「いつそ殺して下さい」

「殺人犯になるからやだ」

「……リアルですね
現実的です」

「ありがとう……」

29（後書き）

リクエストまちです！！
ネタください！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0546y/>

デカ物語(未来)

2011年11月24日19時49分発行